

史談

2008 (H20) 12・20

■ 講演会・研究発表会行われる

この11月15日に歴史講演会と研究発表会が開かれました。講演会は米沢から直江兼続を研究しておられる小山田信一氏を迎え、兼続の生涯や当時の藩の状況、上杉藩における功績などについて幅広く語っていただきました。



1月からはNHKの大河ドラマがはじまりますが、一般的にはあまり知られていない兼続の生涯がどのように描かれるか、楽しみにしたいと思います。

■ 会誌『史談』への原稿について

現在、今年度の会誌の原稿を募っています。長さは一人につき、タイトルと写真込みで約6ページを目安としています。内容は問いませんが都合で短くなる場合があります。原稿は原稿用紙でもフロッピーでもかまいません。早めにご用意ください。封書は横田尻 1214 丸川宛。

■ 研究集会の後で懇親会・・・

今回の研究集会では佐藤與七さんが「船山清四郎戸長事務日記について」、丸川が「五倍子について」それぞれ発表しました。その後、初めての試みでしたが場所を変えて懇親会を行い、余興の「勝手に鑑定団」には大鉢のほか、

偶然にも瀬戸物の「尿瓶」が2個出てきて、話が大いに盛り上がりました。



今後もこうした機会を作り、会員の親睦を図りながら骨董などにも目を向け、より楽しく学ぶような場を作っていきたいと思っています。

(写真は3枚とも長沢が撮りました。)

■ 湯神

下山鉱泉の宿から、山に向かって車を走らせた。沢沿いに細い道が通っており、落葉が厚く積もっていた。タイヤで踏みつぶされる小枝や葉の音が冬枯れのわびしさをつのらせた。500メートルほど登っていくと、道は狭くなり車を通るには危うく、ところどころにぬかるみが見えてきた。車を止めて、細い道を歩き始めた。

天気予報で明日から雪が降るというので、石塔を写真に撮っておきたいと家を飛び出して来たのである。その石塔は山道の行き止まりにあると聞いたのだが、山と山に挟まれた細道は薄暗く、一人での探索は心細かった。足を踏み出すたびに、褐色に変色した葉がカシャカシャと音がした。自然のいとなみによって土に返っていく光景に、自分の行き先を重ねてとぼとぼと足を運んでいた。清冽な沢水に手を出していた。水の冷たさも考えずに、水を掬って喉を潤

した。先程まで、このまま異界へ歩いていっても自然であるような気がしていたのに、沢水が身体に染み込んで細胞が生きかえった。いのちを支える水を改めて感じられた。あたりは水気でじっとりとしている。つやつやした苔や草木も、一言の文句も言わずに生きていた。

道の切れた所に、四角いコンクリートで固められたものがあつた。そこが下山鉱泉の源泉であつた。硫黄の臭いが鼻をかすめた。縦73センチの石塔に「湯神」と「山神」の文字が刻まれている。裏面に生えた苔を削り取ってみると「天保四巳四月八日、木食秀海、奥山仙之助」と読めた。



(湯神・山神碑)

下山鉱泉は文化4年(1807)奥山仙之助によって発見されたものである。強度のアルカリ性硫黄泉で特効の口上によると、皮膚諸病、外傷、化膿症、婦人病、中毒諸症、肝臓諸病、慢性胃腸カタル、リウマチス、痛風、神経痛、慢性呼吸系統諸炎症、眼病、癩、疔に効果を見せる。下山村の証誠山寿量寺の住職秀海上人は湯殿山で二千日山籠の修行を積んだ行者であつた。昭和7年(1932)の下山鉱泉常盤湯後援会の趣意書には「下山鉱泉常盤湯を回顧するに、文化四年の開湯より百二十有余年の間他鉱泉の不遇時代に際しても、尚且独特なる神秘的効能と各位の理解ある御同情との賜物により特筆すべき緩みも無く栄えに栄え今日に到る」とあり、下山鉱泉の繁栄が伺える。名湯として県外まで知られ、四季を通じて湯治客で賑わつたのである。(江口儀雄)

■ ウルシかぶれ 3

ヌルデのほかにも見た感じがウルシと似たような樹木は多く、木の形や枝ぶりだけでは慣れないと見分けがつかない。キワダやシンジュも似ているが、ヤマウルシ、ツタウルシ、ハゼノキなどは免疫がなくて皮膚の弱い人はすぐにかぶれるやっかいものである。

そういう私自身も今回の発表のために「五倍子(ふし)」のことで標本を採りに山に入ったら、どこかで木に触れたらしく、何年ぶりかでウルシにかぶれた。顔や首のまわり、目のふちなどがかゆい。手にはちいさな水泡もできた。ここ何年もかぶれたことがなかったのと、木の葉も落ちて一部は霜枯れしているので、たいしたことはないだろうと甘くみたせいである。また、ついうっかり手袋もしていなかった。

幸いにも陰部はさしたることもなく、医者にゆくほどでもなかった。とんだ研究発表になつたが、それでもおかげでずいぶんいろいろなことに出くわし、勉強にもなつた。私たちのすぐ身近なところに、こんなにもいろいろなものがあつたのかと、改めて思った。

特にヌルデの「五倍子—フシ」を材料にした「お歯黒」のことには意外なことが多かつた。どういうわけか最近のテレビの時代劇に出てくる女性たちは、ほとんど真っ白できれいな歯をしている。しかし当時の公家や大奥、大名に連なる女性たちにとっては、身分が高ければ高いほど毎日の身だしなみとして「お歯黒」は欠かせないものだったのである。

今では想像もできないが、女性たちは競って歯をできる限り黒く、しかもむらなく染めることに苦心したらしい。それは手間のかかるもので、第一に材料の入手もさることながら、剥げ落ちていないかと常に気を使つていたようである。現代の女性たちの髪や肌の手入れに相当するものかも知れない。(丸川)

■ 新入会員紹介 川村 正さん

東根在住、宮大工として県内だけでなく、東北各地で仕事をしておられます。